

◇日隈・日前・熊野家の先祖祭祀復興

紀元前後から大和朝廷が成立するまでの歴史は、今風の考えからは考え及ばないところが多々あるものの、古社の縁起や伝承、記紀の記述、東アジア史、不老不死・魂再来を唱えてきた神仙思想、さらに発掘結果を手繰って行くことで、そこそこは見えてくるものだ。

具体的に言うと、一世紀前半に、高天（日高と天之国）の率いる倭奴国王朝が北九州に興り、東海地方まで短期間に制圧した。女系の天神を担ぐこの王朝は、福岡平野に天宮（天上の都）を構え、神国づくりや鉄器づくりに勤しんできた。

ところが一七〇年代になると、畿内のオロチ族が挙って王朝を疎んじたことで、六代目天神の天之尾羽張神は日隈（熊野家）の伊奘諾に東方統治の建て直しを詔した。

一八〇年代中頃、彼は大軍を率いて東勢を押さえつけにかかったが、逆襲されて吉備・出雲・北九州を蹂躪された。結果、畿内に邪馬台国（越オロチ系の厳之国王朝、倭奴国王朝再興を夢見る天（厳）之国、同じく日本王朝に発展）が興り、天下が入れ替わった。敗れた伊奘諾勢は日隈の本拠・熊襲に逃げ落ち、高天も高千穂郷に押し込まれた。

この百十年後、彼らの末裔が東征して邪馬台国を討ち、三〇一年に大和朝廷を打ち立てたのだ。見方を変えると、神仙思想の唱える不老不死・魂の再来は、一人として実現できなかったものの、家や王朝のレベルでは見事に成就できたことになる。

『旧唐書』「倭国日本伝」、「倭国は古の倭奴国なり」

日隈・日前に限って言うと、天神に代わって天下に号令してきた日隈は、大乱後はお家断絶に追い込まれた上に、熊襲の地で臥薪嘗胆を強いられた。それから百年後の二八〇年代中頃、この一族が挙って東征軍に参軍し、数多の犠牲を払いながら紀伊・熊野の地で、お家再興と先祖祭祀

復興を叶えたのである。

この間、伊奘諾は、天神天之尾羽張神から神国・常世づくりを期待される中、日前と称して強引に振舞ったり、おごり高ぶったりしていた。

大乱後も、熊襲と蔑視されて迫害された上に陪臣並にあしらわれ、呉軍撃退の激務に回された。ところが二八〇年前後に、景行・仲哀率いる熊襲征伐軍を二度も撃退して自信を取り戻すや、一族存亡を懸けた東征に打って出て、恨み重なる日本王朝を叩きのめした。

波乱万丈のその歴史は、大和朝廷の生き写しと言っても過言ではない。今一度、日隈が再興を果たした苦難の道のりや、紀伊・熊野で先祖祭祀復興をかなえた過程について知っておきたい。

①一七〇年代に入ると、伊奘諾は天神天之尾羽張神から神璽としての瓊矛を賜るとともに、

「国体の緩みきった王朝を草創期のごとく建て直せ。必要とあらば、伊奘諾自身が豊葦原瑞穂国・大倭国・大倭巖・三輪氏の在所に乗り込んで行き、当家の思うままに動く東方につくり変えてみせよ」と下命されて、七代目倭王に昇りつめた。

絶頂期にあった彼は、豊葦原中つ国から養子にとった大穴持に熊野櫛御氣野（日隈の跡継ぎ）と語らせると、次に豊受皇太神（太子）に格上げして、東の国々を手なづけにかかった。

②一八〇年代初め、天神の宗女で伊奘諾の養女だった向津姫は、豊受皇太神を婿養子に迎えた。

③一八四年、中国で内乱が勃発した。この時期、伊奘諾は淡路島遷都を押し進める裏で、豊受皇太神を太子から外し、我が児に置き替えようと動いた。対する皇太神は東勢の大倭巖・三輪氏・豊葦原瑞穂国らと手を組み、播磨や摂津で戦いを挑んできた。

④出雲での天下分け目の決戦で、皇太神が大勝してオロチ系の巖之国王朝（邪馬台国）を再現して見せた。その後、皇太神は天叢雲とも天照大神とも称して纏向に都した。

彼は出世のたびに名を取り替えたことで、大穴持、神皇産霊、佐太大神、大国主、国常立、

豊受神・御饌津神・月神・月読命・豊受(天照) 皇太神・豊受大神・天御中主・高皇産霊・牛頭天王、熊野権現の名を合わせ持っていた。

⑤北九州の地を追われた伊弉諾は、向津姫と共に高千穂郷に押し込まれた。そこで天照大神から日隈断絶・熊野追放を言い渡されたことで、向津姫を跡継ぎに指名して、日神の天照大御神に祭り上げた。あわせて、日隈・日前・熊野家の再興を日神と素戔嗚に託した。

⑥伊弉諾は、表向きには素戔嗚に向かって、「高千穂宮に居ってはならぬ。根の堅洲国なり何なり、とつと出て行け」と詔したが、心の底では、素戔嗚がオロチの天照大神親子を討ち果たし、豊葦原中つ国を建て直してくれるよう念じていた。

⑦伊弉諾が大妃と共に熊野に向かうと、日神は高千穂宮を天宮と定めて日天神の位に昇った。これを祝して、石凝姥が八咫鏡二枚(日の像の鏡、天璽の真経津鏡)と日矛を鑄造した。

⑧天神となった日神も、素戔嗚に対して、「高千穂宮に居てはならぬ」と追放を申し渡す裏で、一刻も早い豊葦原中つ国の建て直しや熊野家再興を切望するあまり、熊野櫛御気野と語れる権利、日矛・日の像の鏡(最初に鑄込まれた八咫鏡)、それに熊野家相続人と目される熊野クス日(五十猛)を彼に授けた。その際、日矛や日の像の鏡に対して、熊野家再興を密に祈願していた。

⑨新羅に渡った素戔嗚は、オロチ退治を決意するなり、新羅王に五十猛と日矛を預けた。新羅王は彼を天日槍と命名して、我が子として養育すると日矛に誓った。

その後、素戔嗚は出雲に潜入してオロチ親子を討ち、出雲で熊野家(出雲日隈)再興を果たしたが、大己貴に日の像の鏡を奪われてしまい、豊葦原中つ国の建て直しも叶わなかった。

⑩一方、大穴持と大国主を襲名した大己貴は、日の像の鏡を手にして葦原中つ国王と語っていた。
⑪二一〇年頃、日矛を奉じた天日槍が将兵八千とともに播磨に押し寄せてきた。迎え撃つ大己貴は、彼から将兵八千も日矛も奪って八千矛と語ると、大物主の陣営だけを狙って攻め立てた。

⑫防戦一方の大物主は負け戦が続いたあまり、大己貴を心底憎むようになった。日神も、大己貴に豊葦原中つ国の建て直しを妨害されたことで、怒り心頭に達していた。

ここに至って、南北からの外敵（遼東勢と呉）にやきもきしていた天照大神は、妻の日神と組む以外にないと悟った。大物主や豊葦原瑞穂国までが天神の御子を豊葦原瑞穂国と日高国の王に迎えるのが最善と見て高千穂宮に使者を遣り、日神を口説きにかかる始末だった。

日神も邪馬台国との盟約を優先して取り決めばかりを急いでいた。

「この国を外敵から守るには、大己貴を説得して天神の御子に国譲りさせると同時に、全軍の指揮を一本化せねばならぬ。まずは高千穂宮に司令部を設置して、天照大神にお出まし願おう」天照大神も皆の期待に応えて快諾すると、高皇産霊とも経津主とも称して高千穂宮に赴いた。

⑬日神と高皇産霊が国譲り説得の使者を大己貴の許に派遣すると、大己貴親子は潔く応じた。同時に、日の像の鏡も日矛も差し出した。

⑭素戔嗚による熊野家再興が頓挫したことで、日神は南国に天降る火瓊瓊杵に天叢雲劍・八咫鏡・日矛を授けて、日隈・日前・熊野家の再興を託した。その際、この八咫鏡を心ひそかに日前鏡と改名した。だが、火瓊瓊杵による日隈・日前・熊野家の再興は、遅々として進まなかった。

⑮火瓊瓊杵の降臨直後、日神は夫の天照大神と共に伊勢で暮らしたいとして、高千穂宮を發つて大倭に向かった。その途上の紀伊浜の宮で、五十猛にこう詔した。

「素戔嗚が出雲で興した熊野家を紀伊秋月の地で、熊野家本家として興すがよい。その印しとして近々に、日矛など日隈神宝を与えよう」

結局、日隈は日前鏡を奉祭する日前（熊襲）、日矛を祀る紀伊熊野家の二家が並び立った。

この直後、天照大神が急逝した。日神は纏向入りして邪馬台国の女王ヒミコに転身した。程なく、ヒミコによる先祖祭祀の一本化が決まったことで、火瓊瓊杵の所持する天叢雲劍・日

矛がヒミコの許に届けられた。この日矛は紀伊の五十猛（天日槍）に託された。

ここに、銅剣を祭る敵之国王朝は、鏡剣を奉る天（敵）之国王朝に移り変わった。

⑩二四〇年前後、火瓊瓊杵の児である火照（海幸彦）と火火出見（山幸彦）が日前の太子の座をめぐって争い始めた。打ち負かされた海幸彦は、命乞いまでして火火出見に謝った。

⑪二四〇年代末、ヒミコが逝くと、天（敵）之国王朝は日前から降臨してきた火明饒速日（饒速日、海幸彦）率いる日本王朝に様変わりし、日前（日隈）も火火出見に代替わりした。

この火火出見も、伊弉諾夫妻や熊野櫛御氣野を熊野家祖霊としてお祀りしたいと決意していた。⑫二七〇年代後半、海幸彦だった饒速日は、火火出見との誓約を消し去りたい一心から、景行に熊襲（日隈）征伐を命じたが、景行は捕らわれの身となって日向に六年間も抑留された。

⑬二八〇年代中頃、西海道都督に昇った仲哀は、火明饒速日から二度目の熊襲征伐を拝命するや、紀伊で祀られていた日矛を持ち去り、西海に向かった。

仲哀率いる皇軍は樞日宮から出撃したが、あつさり敗れて日矛も十握剣も敵に奪われた。

同じ頃、火火出見の跡を継ぐ磐余彦も先代の遺勅を掲げて東征を決断した。同時に日隈・日前・熊野家を再興し、伊弉諾・熊野櫛御氣野親子を熊野家祖霊としてお祀りしたいと決意した。

⑭東征軍は、大阪湾を南下して紀伊と熊野を制圧した。その際、熊野家祖霊にこう申し上げた。「熊らは数々の不義を重ねました。よって、所領を召し上げます。ここに日隈・日前を再興するにあたって、日前鏡・日矛を共に揃えて秋月名草宮に奉りますと誓った次第です」

こうした流れの中で、紀伊や熊野での祭祀がこう決まっていた。

一、日隈・日前の再興や先祖祭祀の落ち着く先は、紀伊秋月の地

一、熊野家の先祖祭祀が落ち着く先は、薩摩・出雲・紀伊ではなくて熊野の地

一、紀伊の熊らは秋月から追い出され、由緒ある祭祀場も別の場所に移された。